

大釜菰堂論 ——『種ふくべ』二種をめぐって——

文学研究科国文学専攻博士後期課程3年 根本 文子

はじめに

近代俳句の黎明期にあった明治二十九年九月二十一日、京都の俳人、中川四明が立ち上げた京阪俳友満月会は正岡子規の郷里松山の「松風会」以外で、初めての日本派を標榜する地方俳句結社として子規の俳句革新を一步進める大きな役割を果たした。

この京阪俳友満月会第一回句会（明治二十九年九月二十一日）参加者の中に「菰堂」という名前が見える。さらに調べてみると菰堂は子規晩年の評論「俳句上の京と江戸」を最初に掲載した俳誌『種ふくべ』（明治三十三年四月・三日発行）の編輯発行人である。

他方中川四明が、京阪俳友満月会の人々と共に俳誌『懸葵』を創刊するのは『種ふくべ』から四年後の明治三十七年二月十一日である。この時、四明は「子規子の遺訓」として子規の評論「俳句上の京と江戸」を再掲載する。そしてこの評論が本来は俳誌『種ふくべ』創刊に際し、自らが子規に懇願したものであり、その『種ふく

べ』は「一号を出したのみにて廃刊」してしまった。しかも明治三十五年に子規が亡くなったことは誠に残念である、と述べている。そして『懸葵』に再掲載した「俳句上の京と江戸」を、「今ここに吾等同人の之を遺訓として長く守らんことを相誓ふのみ」と語る。つまり、俳誌『種ふくべ』創刊に際し、子規に「俳句上の京と江戸」の執筆を依頼したのは四明自身であること。その『種ふくべ』は創刊号を出したのみで廃刊というのが中川四明の認識であった。ところが『俳文学大辞典』（角川書店）では『種ふくべ』を次のように解説する。

俳誌。明治三三（一九〇〇）・四、京都市で創刊。中川四明を中心に、大釜菰堂の編集発行。京阪満月会が母胎。正岡子規の「俳句上の京と江戸」を掲載。一時休刊後、明治三三年一月、和歌山県新宮町（新宮市）で再刊後、二号で終刊。（和田克司）

すなわち『種ふくべ』は創刊号で廃刊したのではなく二号まで続いた。その二号は京都ではなく、和歌山県新宮で出されたということになり、四明の認識との間に齟齬を生じさせている。

四明は何故「一号で廃刊」と書いたのか。それに対し『俳文学大辞典』が「二号で終刊」とあるのは何故か。本論文は、子規や、中川四明に関わりながら殆ど語られることのない「菰堂（菰堂子）」こと、大釜菰堂（弥三郎・彌三郎）と俳誌『種ふくべ』について追跡し、近代俳句の黎明期の一隅を照らそうとするものである。

一 京都版『種ふくべ』の創刊とその周辺

明治三十三年四月三日 京都から大釜彌三郎を発行兼編輯人として『種ふくべ』が創刊された。表紙は中村不折で、大きなふくべの前で半月を見上げる、ちゃんちゃんこを着た猿の後ろ姿である。書名の「種ふくべ」の文字は中川四明であり、下段欄外に「第壹巻第一號」と横二段に印刷されている。一応これを「京都版」とし、その目次を次に掲げる。

種ふくべ第壹巻第壹號目次（明治三十三年四月・三日発行）

○発刊の一句

○祝辞及び祝吟

○種瓢の序

○俳句上の京と江戸

鳴雪 露月 等

青 嵐

子 規

○審美俳話

○アストン氏の俳諧論

○俳人米仲

○文学者の商人根性

○俳魔語

○俳句の神

○御取越

○遊女と俳句

○竹外一枝

○梅花十首

○落柿舎懷古

○俳句

○募集俳句

○俳句界

○意馬心猿（表畫）

四 明

非 無

露 石

文 芽

青 主

菰 堂

杜 葉

煙 村

野 叟

愚 庵

月 郊

中 村 不 折

明治三十三年二月十日印刷

明治三十三年二月十五日發行

京都市五條橋東二丁目十九番戸

發行兼編輯人

大 釜 彌 三 郎

京都市寺町通今出川五丁上ル歛喜寺前町

印 刷 人

中 村 市 太 郎

京都市三条通東洞院東入曇華院前
印刷所 合資商報会社

京都市五条橋東二丁目十九番戸

発行所 種ふくべ発行所

なお発行日が、目次では四月三日であるが、奥付では二月十五日となっている。奥付の訂正を失念したと思われる。

次に京都版『種ふくべ』の主な内容を見る。

石井露月の「寄語」、内藤鳴雪他の「祝句」十四句、晴風の「種瓢の序」、に続き子規の「俳句上の京と江戸」が約八頁にわたり掲載されている。病臥の子規を想像するとその長編力作に驚くのであるがその本文冒頭の部分を見る。

尚、この論文送付に添えた明治三十三年一月二十三日付、子規から四明宛書簡によると、

「これは出鱈目に言文一致風に認め候もの故どこか雑誌の隅の方へ御載せ被下度候」とあり、子規が逡巡しながらも最初に書いた言文一致体の文章と推察される。その不慣れなチャレンジの影響か、いつもの子規らしくない、ぎこちない文章である。

俳句上の京と江戸

子規

京都から「種ふくべ」という俳諧の雑誌を出すから、私にも何か書けとのごさいました。昨年来俳句の流行につれて各地に其雑誌が出るようになりましたのに、昔からの都であつた京都に何もないというは不釣合な事であるから「種ふくべ」の出るのはまことに適當なことと考へます。併しながら雑誌の發育はかなり困難なもので、寄合世帯のやうでは到底永続せぬことは明かでありますから、雑誌を己の生命と思うほどの人が一人なくてはなりません。なぐさみに出す雑誌ならば、盛にならうと衰へようと構わぬとはいふものの、とにかく一度生れた子は成るべく無病息災であるのが親の望むところでありましょう。私はどこ迄も「種ふくべ」の無病息災を祈つて居ります。(傍線・論者)

子規は自らが経験した『俳諧』(明治二十六年五月、二号で終刊)、『小日本』(明治二十七年七月十五日、一三〇号・約五カ月で終刊)などの挫折によって、雑誌を継続することの難しさ、廃刊の辛さ自身をもつて味わっているのだ、傍線のように「雑誌を己の生命と思うほど」の覚悟を求めて忠告している。事実子規自身も、柳原極堂から受け継いだ『ほと、ぎす』を虚子と共に引き受けるとき、「余はほと、ぎすと終始せんと欲する者なり。(中略)ほと、ぎすは余の生命なり」(「ほと、ぎす発行所を東京へ遷す事」『ほと、ぎす』第二十号 明治三十一年八月三十一日)と覚悟を決めて東遷に立ち向かっている。

『種ふくべ』創刊号の筆者は、ほぼ京阪俳友満月会の人々である。その中で天田愚庵の「梅花十種」が目を引き。当時、京都清水の産寧坂に草庵を結んでいた愚庵と四明は風雅の交流があったことが確認される。

その「梅花」十首の内、四明の前書きとともに最初の一首をみる。

梅花十首

愚菴

冬至より十四五日も前なりけり、愚菴より三つ四つ開きたる早梅の枝を贈られたり其うたを左に

四明

春またてさきたる梅をうつくし

たをりて君か、さしにそやる

愚菴

まだ春も浅い季節に先駆けて、美しく咲いた梅の花を手折り、あなたの簪に差し上げましょう、という早梅に添えた発刊の祝いの歌である。

愚庵は子規との関係も深く、明治三十年十月、帰京する桂湖村に、自庭に実る柿、「つり鐘」を託し、また、翌三十一年十月には同じく「つり鐘」を寒川鼠骨に託し、子規に届けて子規を喜ばせている。因みにその折りの子規の俳句。短歌を次に記す。

つり鐘の帯のところが渋かりき

子規（病牀日記・明治30・10・10）

柿の実のあまきもありぬ柿の実のしぶきもありぬしぶきぞうまき

（竹の里歌）

次に『種ふくべ』創刊号の「募集俳句」の項をみると、子規が明治三十二年十二月十六日付、四明宛書簡で了承していた選句は行われていない。その書簡は次のようなものであった。

牛祭りの仮面難有く候 小生がいたずら書きの材料に相成候
お手紙拝見仕候 寒冷の候に御座候處筆硯益御多祥奉慶賀候
扱て御地ニ於テ雑誌種ふくへ御発行之趣御盛況目出度事ニ存候
右二つき俳句選抜之件承知致候 併し石版摺りの儀は何卒御免
蒙る訳ニハ参不候哉 拙筆見苦しく候へともそれも御雑誌ばかりならば枉げて仰ニ従ふべく乍併近來各地より同様の依頼有之
現に本日も御手紙共に三通参り候 皆石版摺とか申事にて実に
閉口致候 右何とか御工夫替被下間敷や 何にても手ニあふ事
ならバ御申聞次第御助力申上右ご返事旁如斯候 謹言

十二月十六日

常規

四明先生

侍史

名物蕪漬御恵投被下候由難有御礼申上候

蕪村忌の日も近づきぬ蕪漬

（尚 差出し書簡の封緘に子規は蕪の画を描いている）

（『子規全集 第十九卷・書簡二』講談社）

四明に対する書簡は尊敬を込めて丁寧である。書簡にある牛祭りの仮面は子規が書いた「原人」という奇抜な画でよく知られている。

『種ふくべ』に対する選句依頼に対しては傍線のように「俳句選抜之件承知致候」とある。そして石版摺りを否定しながら、「何にても手二あふ事ならバ御申聞次第御助力申上」と、喜んで協力を申し出てをり、子規の意欲の感じられる文面である。そして年末年始の多忙の最中で、病中にも拘わらず一ヶ月あまりで長文の「俳句上の京と江戸」を書き上げ四明に届けている。子規の日本派の俳句の発展にかける思いとその行動力は驚嘆に値する。

俳句選抜が出来なかった裏には子規の体調や多忙の外に、他の俳句誌との公平を謀る子規のバランス感覚が感じられる。結局、『種ふくべ』の募集季題は「風呂吹」のみで選者は中川四明であった。四明選全六十八句に選者吟三句を加え計七十一句を掲載している。

次に発行兼編輯者の菰堂（大釜彌三郎）の雑詠句と中川四明の選者吟を上げる。

菰多き椿の冬や藪の隙

菰堂

選者吟

風呂吹や折りたく柴を炉に読みつ

四明

菰堂の句、春の花である椿はまだ菰ばかりである。その寒さを、藪の中は「椿の冬」と表現した。

四明の句、風呂吹き大根を炉火でゆっくり煮込む間、新井白石の『折りたく柴の記』を読みつつ自分の人生にも思いを馳せる初老の男。四明の自画像とも受け取れる。

そして次に、目次には無いが『種ふくべ』最終三十一頁で気になるのが、「稟告」と、「俳友諸君に申す」である。まず上段の「稟告」は次のようにある。

稟告

本誌は一月十五日に発行すべかりしを何分新年の折柄とて編輯子らは皆屠蘇の酒機嫌に浮かれ歩きなどせしたため自然遅れにくれて漸く今日發行することとなりぬ諸君幸に種瓢と云ふ名に免じて其のぶら／＼として發行日をも守らず而かも内容体裁等
の太く愚かしかりしをな咎め給ひそ
編輯子識

これによると、本来『種ふくべ』の発行は一月十五日を予定していた。しかし「何分新年の折柄とて編輯子らは皆屠蘇の酒機嫌に浮かれ歩きなどせしたため」遅れにおくれたので、ぶら／＼している。「ふくべ」に免じて咎めないでほしいと、滑稽に言い訳をしている。事実、創刊号目次にある発行日は四月三日、奥付にある発行日は二月十五日なので、創刊号の中すでに発行日が違い、稟告が告げる一月十五日を含めて三回変更になっている。これは後述するが、菰堂の新宮移住の日程が原因と思われる。稟告の筆者は編輯子識とあるが発行人の菰堂であろう。

稟告の下段にある「俳友諸君に申す」は四明である。

『種^アふく^ベ』編輯のこと小生へ御尋ねの方も有之候へども小生は唯つまらぬ文章とくだらぬ俳句とを出し候までにて編輯の事には與からず候御承知置被下度候也

子一月

四明

ここでは、四明のところに『種ふくべ』の創刊についていろ／＼と問い合わせがあるが、自分はつまらない文章と俳句を寄稿するだけで、編集発行には与らない立場であると言っている。四明は発行計画には協力し、創刊に花を添えるべく、子規に原稿と選句を依頼している事は、子規から四明宛て書簡（明治三十二年十二月十六日付）によって確認できる。けれどもそれはあくまで協力で、編輯には与らないことを強く主張している。

四明の協力と多くの賛辞を得て創刊された『種ふくべ』であったが、『編集の大釜孤堂の和歌山への移住が原因で第一号のみで廃刊となる』と、栗津水棹も「中川四明の追憶」（大正六年七月『懸葵』第一四卷第五号・故中川四明翁追悼号）に記している。

以上をまとめると、明治三十三年四月三日、京都から大釜孤堂によつて俳誌『種ふくべ』が創刊された。大釜孤堂は当時二十三歳。京都の俳人で美学者の中川四明が、明治二十九年九月二十一日に立ち上げた京阪俳友満月会の創立準備から参加していた人物であった。京阪俳友満月会は正岡子規の俳句革新を支援する、最初期の地方俳

句結社としてその設立段階から新聞『日本』に掲載され、いまだ少数派であった子規の日本派を大きく後押しする役割を果たしていた。そこから誕生した『種ふくべ』は四明の支援と多くの賛同者が寄稿し充実したものであった。しかしこの『種ふくべ』は「唯た一號を出したるのみにて廃刊せり」（四明「子規子の遺訓」『懸葵』第一卷第一号）という状況になってしまった。

そして明治三十五年九月十九日には子規が亡くなる。

では大釜孤堂とはどんな人物であろうか、中川四明の京阪俳友満月会の設立に参加し、二十三歳の若さで俳誌『種ふくべ』を発行し、さらに新宮でもう一冊の『種ふくべ』を発行したらしい人物。手がかりを求めて和歌山県新宮市を訪ねた。

新宮市立図書館所蔵の資料『熊野誌』二十六号・特集号（昭和十五年六月）に掲載された清水徳太郎「新宮町新派俳句事始」からその経歴をみる。

孤堂、本名大釜弥三郎（『種ふくべ』奥付では彌三郎とある・論者）。明治九年九月二十三日、彼岸の古都京都で生まれた。明治二十五年から三十一年まで（十六才～二十二才）、京都の儒者、林隻橋の永昌塾に入り、漢籍、詩文、書道を学んだが同じ頃子規が唱えた新派俳句を知り、日本新聞を始め、新聞雑誌の俳句欄に投書を始め、傍ら中川四明の率いる「満月会」に加

わり、句会に顔を出すようになった。

さらに同文中の他の項目に「明治三十二年一月、中川四明の引きで日之出新聞編輯部に入り四明の下に、文芸美術担当記者となった」とあるので、四明とは日出新聞の同僚社員として非常に近い関係にあったことは間違いない。

なお参考までに、大釜菰堂については『俳文学大辞典』に次のような記載があるが、『種ふくべ』には全く言及がない。

大釜菰堂 俳人。明治九（一八七六）・九・二三〜昭和三四（一九五九）・三・二三。八二歳。京都生れ。本名、弥三郎。神職。正岡子規門。京都の新派俳句の先達。戦後も『懸葵』復刊に尽力。句「青簾春日八百八欄宜かな」〔妹尾健〕

そうした菰堂について清水徳太郎の「新宮町新派俳句事始」は思いがけない情報を伝えている。

明治三十一年三月、民有社から三原三川 真野碧玲瓏の共編、正岡子規校閲（正しくは『正岡子規校、上原三川・直野碧玲瓏共編』・論者）の「新俳句」という句集が出た。日本新聞社を初め、各新聞、雑誌の登載俳句（投書欄を含めて）五千句を集めたものだが、これに菰堂の多くの句が登載された。何ぶん明治における俳句集の最初のものだっただけに、これで菰堂の俳

人としての格付けが定着されたわけで、後年、新宮金曜会に於いて「子規直門」と唱われたわけもここにあった。（傍線・論者）

俳句選集『新俳句』は明治三十一年三月創刊。子規が、上原三川から届いた校正原稿に全て目を通したもので（宮坂静生『正岡子規と上原三川』、其の序文に子規が「明治俳句集の嚆矢」と宣言したことで知られる。しかしそこに菰堂の句は九句だけである。『新俳句』四八五七句のなかで僅か九句の菰堂句はどう見ても清水徳太郎が記したような「多くの句が登載された」とか、「俳人としての格付けが定着された」とは言い難い。

しかし清水は触れていないが、ここに注目すべきことがある。それは、子規が自分の手控えとして、新聞その他に投句された句を自ら選んで書き留めたものとされる『承露盤』である。この『承露盤』に、菰堂は「菰堂子」として六十九句が掲載されていることである。『承露盤』は昭和十二年（一九三七）九月二〇日、寒川鼠骨が正岡子規編著として、巧芸社から刊行したものであるから子規在世当時は知られていない。しかし今、その内容を見ると、内藤鳴雪、河東碧梧桐、高浜虚子、夏目漱石、石井露月、佐藤紅緑、五百木飄亭、柳原極堂や、森鷗外の句もある。

『承露盤』は総句数七九四八、子規が、明治二十八年から三十三年までの六年間の投句、句稿、書簡等から選句して手許に控え、これを新年、春、夏、秋、冬、と季節別に分類整理したものである。

子規はここから新聞『日本』や『ほと、ぎす』その他に掲載していたと思われるので、この頃子規が良いと思った句は、『承露盤』、『日本』、『新俳句』、『ほと、ぎす』と数箇所に出ているものもある。したがってそうした俳句の作者の名は、日本派の新しい俳句に関心のある読者にとつては、同じ名前をあちこちで度々目にする事になり、印象づけられることになる。「菰堂（菰堂子）」という名もそのようにして、遠い新宮の人々にも印象づけられ、新宮の新派俳句結社「金曜会」においては、「子規選に度々選ばれた人」として、「子規直門」ともてはやされ位置づけられのではないかと考えられる。『承露盤』の菰堂の句は二十九年から三十一年に集中しているがその句数の多さを見ると若干二十三歳の菰堂が俳誌を出そうとした動機が伺えるようである。

『種ふくべ』発行の動機が伺えるものとして清水徳太郎は亀田小帖（俳人・『糸瓜』主宰）の「春は行く」（俳誌『砂丘』第一八七号、昭和四一・五所載）を引用してその時代背景をあげる。亀田によると、「関西では既に大阪の『車百合』の第一期が一度没落したあとなので、唯一の俳誌となつて、諸国俳友がワンサと投稿してきた」のだという。

つまり、子規の俳句革新運動による日本派の俳句の発表の場を、ようやく人々が求め出してきた時代であり、その要請に応えるものでもあったということであろう。

『車百合』は大阪の青木月兎が明治三十二年十月、弱冠二十一歳

で立ち上げた俳誌である。この時子規は喜び、祝句に「俳諧の西の奉行や月の秋」を寄せたことはよく知られている。芭蕉の時代、「俳諧の西の奉行」と云えば芭蕉の高弟として著名な『去来抄』の向井去来である。（誠に洛陽に去来ありて鎮西に俳諧奉行なりと故翁も称し給へれば）支考編『本朝文鑑』。因みに東の奉行は杉風である。そう考えると子規の月兎への祝句は大変な賛辞であり、新聞記者である子規の人心掌握が巧みなどころでもある。それだけ関西方面にも日本派の俳句を浸透させたいとする気持ちの強さが見えている。そしてそこには菰堂が京都に俳誌『種ふくべ』を立ち上げようとした動機に関係がないとは言えないであろう。

結果として明治三十二年十月、大阪に青木月兎の『車百合』、同三十三年四月、京都に大釜菰堂の『種ふくべ』が創刊され、しかも月兎二十一歳、菰堂二十四歳の若さであった。そしてその事はまた日本派の俳句を京都、大阪にも広めたいという、子規や、四明にとつても大きな一歩であったのである。

しかし、編集発行者の大釜菰堂はこの『種ふくべ』発行日の四月三日以前に、新宮に移住したと考えられる。

二 新宮版『種ふくべ』とその周辺

新宮市立図書館提供の資料『熊野誌』二十六号「新宮町新派俳句事始」の筆者清水徳太郎は、菰堂が新宮に来たのは明治三十三年三

月だという。これが確かだとすると京都版『種ふくべ』が発行された、明治三十三年四月三日には、菰堂はすでに新宮に移住していることになる。『種ふくべ』の発行日の混乱は、発行日前後に発行者大釜菰堂が京都に居なかったことにも原因があろう。

新宮町に『熊野實業新聞社』が創立されたのは、明治三十三年三月、創立者は津田長四郎である。清水の記述によると、

初代記者として、京都新聞から主筆に浅田空花を、同じく京都の日の出新聞から大釜菰堂を招聘した。二人は一流紙並みの高級で迎えられたことは、貴船神社に残る菰堂の履歴書から判明している。二人は三月の初旬には新宮に入った。(略)

空花二十五才、菰堂二十三才であった

しかし空花は六ヶ月余で新宮を去ったという。そして「上京後、報知新聞へ入社。明治三十九年四月博文館に転じ、後、同館編輯部主幹、「太陽」の編集長となった、明治期ジャーナリストの代表的な一人であった」と伝えている。

ところで、清水徳太郎は、菰堂の新宮行きのいきさつを、京都版『種ふくべ』の「印刷代の滞りを決着するための都落ちではなかったのか」と推測している。

たとえば実業新聞社からの前渡金で支払ったとか、破格の給料から月々なしくずしで決済したとか——そうでなければ、いくら高級を示されたとはいえ、折角得た日の出新聞の椅子を一年そこそこで棄て去って、田舎の新聞へ変わって行った理由が何とも説明がつかなくなる。

これによると、京都版『種ふくべ』の発行は予想外に経費がかかり、菰堂はその支払いに苦慮していたと推察される。にもかかわらず京都版『種ふくべ』からおおよそ七ヶ月後の十一月二十五日に新宮で再び『種ふくべ』を発行している。それを清水は次のように書いている。

この三十三年十一月、おそらく読者には信じられない話だろうが、実は大釜菰堂の手により、新宮最初の俳句雑誌が生まれているのである。即ち筆者がひそかに「まぼろしの俳誌」と呼んでいる「種ふくべ」の発刊がそれである。

ここで清水は「まぼろしの俳誌」と語るが、彼は実際には『種ふくべ』の新宮版はもとより、京都版の『種ふくべ』をも見ていないのではないかと想像される。なぜならその両俳誌の内容には全く言及していないのである。見るべきでなかったのでわざわざ資料を探し、これに言及している亀田小帖の「春は行く」を引用したのであろう。亀田小帖は『糸瓜』主宰。著書『子規時代の人々』(昭

42)がある。

次に清水が「まぼろしの俳誌」とする新宮版『種ふくべ』の目次を掲載する。尚新宮版『種ふくべ』は、新宮市立図書館にも原本は存在しないが、原本の全頁複写が保存されており、本稿ではそれに基づくものとする。下段に「前号目次」の二段組になっている。

種ふくべ第壹巻第壹號目次 前號目次

明治卅三年十一月廿五日發行

●再刊の辞（無署名）	●發刊の一句
●奇瓢來の辞	●祝辞及び祝句
●審美俳話	●種瓢の序
●紀州熊野	●俳句上の京と江戸
●牛祭看の記	●審美俳話（一）
●水ぐき	●アストン氏の俳諧論
●閨の此月	●俳人米仲
●かねの音	●文学者の商人根性
●村もみじ	●俳魔語
●獅子蕃椒	●俳句の神
●秋十句	●御取越
●相撲十句	●遊女と俳句
●似柿	●竹外一枝
露石	野梅村叟

●虚栗	菰堂	●落柿舎懷古	月 郊
●俳句		●梅花十首	愚 庵
●募集俳句（瘦石・菰堂選）		●募集俳句	四明選
●俳句界		●俳句界	
●表畫	不折		

明治三十三年十一月廿五日印刷

明治三十三年十一月廿五日發行

發行兼編輯人	大 釜 彌 三 郎	紀伊国東牟婁郡新宮町五百十六番地
印刷人	川 北 不 二 夫	紀伊国東牟婁郡新宮町五百十三番地
印刷所	熊野実業新聞社印刷所	紀伊国東牟婁郡新宮町五百十三番地
發行所	種ふくべ 發行所	

これによって、『種ふくべ』第壹巻第一号は確かに京都と新宮双方で一冊ずつ、計二冊發行されていることが確認できる。ただし新宮版は本来二号と思われるが、京都版に凡そ七ヶ月ほど遅れながら不折の同じ表紙をそのまま使用し、「第壹巻 第一號」とある。しかもよく見ると京都版とは活字の字体が違い、字もやや小さいが、

不折の画は全く寸法も同じである。つまり新宮版は京都版『種ふくべ』の不折の表紙をそのまま使い「第壹巻 第一號」だけ活字を入れ代えている。入れ替えるならなおさら「第壹巻 第二號」でよいと思われるが、なぜまた敢えて「第一號」なのだろうか。

目次も「種ふくべ第壹巻第壹號目次」とあり、上下二段で、下段に前号目次を掲載している。第壹巻第壹號の目次に前号目次があることに違和感がある。

奥付を見ると発行兼編輯人の住所は菰堂の住所らしいが、印刷人、印刷所、発行所、の住所は「熊野実業新聞社」の住所である。

また目次に記載はないが、菰堂が「金曜会（紀州）」という題で二十六頁に、当時熊野に存在していた日本派の句会、「金曜会」との出会いを書いているのが注目される。

余が今春京を辞して始めて此の熊野の山水にあくがれ来し時、已に此金曜会と名乗る新派の俳団が組織せられつゝあつて、湯田猿叫といへる石井露月の俳友とかで、大学出身のくすしが四名の同人らと共に、健気にも新俳諧の福音を盛んに四方へ鼓吹して居つたので、余が新来の此の熊野にて一番なつかしく嬉しく感じたのは、決して名物の初鰹や鯨肉が喰へるからでもなく、偶然にも余と同趣味の此の会が存在して居つたことであつた。

菰堂はなかば都落ちの如く、初めて熊野の山水の地に来てみると、思いがけず新派俳句の集団がすでに出来ていた。同じく新派の俳人である自分は、熊野名物の初鰹や鯨肉よりもそれが一番懐かしく嬉しかった。そしてそれを束ねているのは、湯田猿叫という石井露月の俳友のくすし、つまり医師であつた、と言う。石井露月は東京の済生学舎で学んでいるので猿叫はそこで露月と知り合ったものと思われる。

石井露月は秋田出身。後に『俳星』を主宰するが、当時は子規の『小日本』を手伝い、終刊後は『日本』の記者となつて子規に俳句を学んでいる。その間、医術開業試験に合格したものの脚氣を患っていた。体調の良くない露月を心配した子規は、四明に手紙を出して（明治三十二年四月十日、四明宛子規書簡）露月のために京都での就職を依頼したのである。その結果露月は四明の奔走により、明治三十二年四月から京都の東山病院に勤務している。五月二十七日付、子規から四明宛て書簡、「石井露月の身の上に付種々ご配慮下され」の礼状が残されている。

その露月が京都東山病院に勤務中に参加した京阪俳友満月会の句会で、京都の菰堂は露月に会っている。（露月山人「四明翁と余」（『懸葵』四明翁追悼号）。従つて菰堂は京都にいた当時から、露月が子規に近い著名俳人として知られていたことをよく認識していた。菰堂と猿叫は露月の縁による共通の話題もあり、菰堂はたちまち新宮の「金曜会」で活躍するようになった。しかし二人の親交は長

くは続かなかった。その年の八月、湯田猿叫が肺患により亡くなってしまうのである。「金曜会」の創立者を突然失った菰堂であるが、この時「会員も二十余名に上がって、優に日本俳壇南海の雄鎮と目せらるゝ迄に至つた」と高らかに書いている。そして猿叫の死を踏まえて「余も亦敢えて同会のために尽力せざるを得ざる事となつた」とし、「亦幸に雑誌『種ふくべ』も此会の助太刀を得て再び発刊の運に会し（略）田辺の諸同人と共に、大いに関西の俳壇に貢献する所あらむと期するに至つたのである」と『種ふくべ』再刊の決意を表明している。ところが菰堂の思うようには事は進まなかった。

三 『種ふくべ』の廃刊と復刊

新宮版『種ふくべ』の「稟告」に筆名はないが多分発行人の菰堂と思われる記載があり、二種の『種ふくべ』の廃刊と復刊の経緯を伝えている。

稟告

○本誌「種瓢」は今春京都に於いて一時がら／＼と鳴り出でたるのみ、いさゝか触る事ありて永らく再刊の運びにも立至らざりし所、こたび又もや京阪紀の諸 同人らと相謀りて、漸く当熊野より此度こそは千生瓢筆となるに至るまでも続々発刊致し

申すべき事と相成候、

○右の次第なれば、本誌発行権も己に消滅に歸し去り候ため、今回は更に又発行届を差出し候やうの事にて、初号発刊の次に再び初号の発刊を見るが如き奇観を呈し申し候へども、それ則ち俳諧雑誌の俳諧雑誌たる所以として、何卒御見免しの程奉願候。

これを整理すると、京都版『種ふくべ』は中川四明の協力を得て子規の論文を中心に、新派の著名俳人の寄稿と募集俳句を掲載して京都で創刊した。しかし「いさゝか触ること」つまり清水徳太郎が想定している予定外の費用が生じ、一号のみで継続発行が出来なかった。その対策も兼ねて発行兼編輯者の大釜菰堂は急遽新宮の『熊野實業新聞』に移動する。このとき菰堂の言う「発行権」（出版権と思われる・論者）も菰堂について移動した。しかし熊野に来てみるとそこには新派の俳句会「金曜会」が出来ており彼等到大歓迎を受ける。そこで菰堂は代表の湯田猿叫と協力して活動、新宮の新派俳句は黄金時代を迎えた。参加俳人も増えこれから言うときに猿叫が肺患で亡くなる。二十八歳であった。この時の菰堂の行動は確かに拙速ではあるが、猿叫に代わって紀州の同人と共に「関西の俳壇に大いに貢献する所あらんと期するに至つた」と、新宮版『種ふくべ』再刊の辞に決意を表明している。そこには夭折した猿叫への追悼の思いも背中を押したに違いない。

事実、菰堂は新宮版『種ふくべ』の十九頁に以下のように述懐する。「斯く熊野の俳運の隆盛に赴くにつけ、余は猿叫の存生ならば彼のおどろしき髭面に如何なる笑みをうかべるであらうかと漫ろに追懷の情に堪えないのである」と。

しかし俳誌の発行継続は、嘗て子規が忠告したように簡単なことではない。

さらに稟告には「発行権が消滅したため、初号の発刊の後に再び初号の発刊を見るが如き奇観を呈し申し候へども」と京都版も新宮版も一号になってしまった理由を「発行権が消滅したため」と述べている。ではその発行権の消滅について考える。

まず『種ふくべ』の一号が二度発行された経緯について、前述の新宮版『種ふくべ』の「稟告」には発行権がすでに消滅した結果として次のようにある。

稟告（抜粋）

本誌発行権も己に消滅に歸し去り候ため、今回は更に又発行届を差出し候やうの事にて、初号発刊の次に再び初号の発刊を見るが如き奇観を呈し申し候へども、それ則ち俳諧雑誌の俳諧雑誌たる所以として、何卒御見免しの程奉願候。

『法令全書』に「発行権」の項目は見あたらないが、明治二十六

年四月十三日改正、の「出版法」には次のようにある。（成田総一郎『實務上より見たる出版法略義・附・出版関係法令集』昭和八年三月十八日 丸の内出版）。

第三章 雑誌

第六節 発行者、編輯者の特別注意事項

雑誌の編輯者は、單行本の著作者に相等する故本節も第二章單行本の「發行者著作者特別注意事項」を再讀されたい。たゞ本節で述ぶることは、

發行者、編輯者、印刷者、印刷所等の変更の場合に付いて、ある。新聞紙法に依る出版物には、変更届に関する規定あるも、出版法には、変更届に関しては何等規定するところがない。故に変更の場合は、変更せる奥付を印刷した出版物（雑誌）と出版届を呈出すれば宜しい。

若し変更届を呈出せる場合には、發行者に其変更届を返送し改めて最初の出版手続きを履行させる事になる。

要するに変更の場合は、最初の出版手続きと同様の手続きを履行すべきで変更届の呈出を要しない。

この条文をふまれば、『種ふくべ』新宮版の場合は、「印刷者」、「印刷所」の変更に該当すると思われるが「出版法には、変更届に関しては何等規定するところがない」とあるので、変更届は必要な

いということになる。しかし何もしくなくても良いのではなく、「変更せる奥付を印刷した出版物（雑誌）」と出版届を呈出すれば宜しい。」とある。そして「若し変更届を呈出せる場合には、発行者に其変更届を返送し改めて最初の出版手続きを履行させる事になる」とあるので、新宮版『種ふくべ』は多分ここに該当し、重ねて「最初の出版手続き」が必要になったので、「第壹巻第一號」とせざるを得なかったであろうと推察される。しかし真実は菰堂が書いているように「俳諧雑誌の俳諧雑誌たる所以として何卒御見免じの程」を了承する他はないのである。

新宮版『種ふくべ』の奥付の上段には、◎で俳句募集が出ている。

長井愚哉選 師走（二人十句吐）

水落露石選 蠟梅（二人十句吐）

以上〆切 十二月十五日限

中川四明選 福引（二人十句吐）

野田別天樓選 車（春季結）（一人十句）

以上〆切 一月十五日限

この時点では、四明をはじめ他の三人の選者もすでに依頼し、稟告にあるように「千生瓢筆となるに至るまでも続々発刊致す」予定であったのであろう。

ところが菰堂は突然、明治三十四年一月二十日、慌ただしく新宮を去る。直接の原因は「彼の書いた記事が社主のさし止めを喰ったのである。腹にすえかねたのであろう菰堂は京都へ窮状を訴えたが、折り返し電報が届いた。「スグカエレ」の電文であった」（清水徳太郎）。こうして、新宮における菰堂の「熊野實業新聞」記者としての滞在は僅か一年に満たないものとなった。

次に菰堂の消息が見えるのはおよそ二年後、明治三十五年十二月五日、三重県南牟婁郡木本町で発行された俳誌『くじら』（発行兼編集人・中西鶴次郎）である。創刊号巻頭言「鯨」の発行については菰堂が書いている。

『鯨』の発行に就て

菰堂

このたび熊野俳人の手に依り、冊子「鯨」の発行せらるゝに就いて、これと多少因縁を有する余は、何か巻頭に一言を題すべき責任あるかの如く感ぜらる。

紀州は昔時六十萬石の大藩中に獅子庵（俳人・各務支考・論者）の俳風隆昌を極めたため、熊野にも或は其俳系伝はらざりしか（略）。

京の「種瓢」に失敗し、熊野の「種瓢」に失敗せし余は、この「鯨」の成功を祈るや切なり。芭蕉逝きて十哲流派を争ひ、子規去つて明治俳壇の統一者を失ふ、同人の築かんとせしバベル

の俳塔は、今や天に達せずして破壊せられ畢んぬ、斯界これより詩神の奇跡に依りて、漸く俳調の侏離を觀るに至らんか、

されば寄語す熊野の「鯨」よ、

熄む時なき海の活動と共に、噴け、絶えず清新の詩潮を。

(傍線・論者)

黒潮や鯨逸せし沖の方

ここで孤堂は、何の悪びれることもなく、何の弁明もすることなく、「京の種瓢」に失敗し、熊野の「種瓢」に失敗せし余」と率直に語っている。そして自分は「種瓢」という大きな鯨を二度も逸してしまつたが、今回創刊された俳誌『くじら』は、「熄む時なき海の活動と共に、噴け、絶えず清新の詩潮を」と鼓舞する。「絶えず清新の詩を噴き続ける」ということは、まさに俳句の生命と言えるであろう。

その上で、俳誌の発行継続には意欲と資金的な支えが、車の両輪の如く必須である。幻の『種ふくべ』にはそこが欠落していたと思われる。

次に新宮版「種ふくべ」の資金的背景を知るためにその奥付、会則を見る。

発売日 毎月一回(十五日)

定 価 一部金八錢△郵税金壹錢△六部前金郵税共金四拾五錢
△十二部前金八拾五錢△郵券代用一割増(壹錢郵券に限る)

規 定 前金に非ざれば發送せず△前金盡きたる時は封皮に朱印を付すべし

広告料 五號活字一行金拾錢△一頁四圓

為 替 振當局新宮郵便局

名 宛 紀伊国東牟婁郡新宮町熊野實業新聞社内「種ふくべ」
發行所

この奥付の内容は『種ふくべ』京都版と殆ど同じである。相違点は転地による①名宛て發行所の住所変更、②為替の「振當局新宮郵便局」への変更だけである。

「広告料 五號活字一行金拾錢△一頁四圓」が目を引く。広告収入を頼りにしている。

次に、二年の時間差はあるが、参考までに『くじら』の会則をみる。

莖菁會々則(必要部分のみ抜粋)

一本會は左の會員を以て組織す

正會員 毎月會費金拾錢を納むるもの

賛助會員 毎月會費金貳拾錢を納むるもの

特別會員 特に本會の趣旨を賛成せられ維持費として一回

或いは二回に金参圓以上を寄付する者、但し終身會費を徴収せず

一本會々員たらんとすものは三ヶ月分以上の會費を前納する事、但郵券代用は一割増しの事

『くじら』の方は會員を正會員、賛助會員、特別會員に分け、それぞれ金額を決めて毎月きちんと入金するよう決めてある。それでも創刊号の最後に「會費未納の會員諸君は何卒至急御送付被下度候」と督促している状況である。

これに比べると新宮版『種ふくべ』は非常に心許ない。誌代と郵送料だけが明示されていて、他には広告料が示されているだけである。

広告料は未確定のものである。會員の原稿や校正は無償としても、印刷料、用紙代、郵送料、通信費、その他細かい諸費用、外部に原稿を依頼すれば謝礼も発生する。これら毎月必ず必要な経費はどこから捻出するのだろうか。早晚発行が出来なくなるのは目に見えている。

『種ふくべ』の京都版に関わり、新宮版にも寄稿してその帰趨を見ていた四明は、明治三十七年二月十一日俳誌『懸葵』を創刊するとき、東京遊学中に『ホトトギス』を知り、正岡子規に傾倒してい

た俳人で、やがて真宗大谷派第二三世官長となる大谷句仏に援助を依頼している。その結果『懸葵』は、四明が没した大正六年以降も安定的に発展し、昭和一九年、太平洋戦争の戦局悪化のため終刊となる四七四号まで発行されている。

一方、新宮から京都へ戻った菰堂の人生の転換を清水は次のように伝えている。

古巢、京都日の出新聞に戻った菰堂は四十二年十二月まで勤務、その後名古屋に出て愛知新聞 扶桑新聞の編輯部長を務めている。

大正四年、神官の試験を通り、貴船神社の禰宜に変わった。次いで大原野神社に奉仕、最後は伊勢の北畠神社の宮司であった。

神官仲間では石笛の名手として聞こえ、俳句では晩年まで「懸葵」の同人、同誌選者の長老であった。昭和三十四年春没した。八十三才であった。

四 大釜菰堂と『承露盤』

俳誌『種ふくべ』一号が二冊も誕生した動機を考えると、元々は子規の新派俳句に興味を持った菰堂が、主として新聞『日本』にこ

つこつ投句し、それが子規選によって度々新聞『日本』等に掲載され、有望な若手俳人として名前が知られるようになり、その結果菰堂が自信を深めたことが指摘できよう。『承露盤』に収録された菰堂の六十九句はその経過を知らせてくれる。

『承露盤』は今ではほとんど忘れられているが、子規の俳句革新運動の初期にあつて、記念すべき俳句集である。子規が自分の手控えとして明治二十八年から三十三年までの新聞その他に投句された句を自ら選んで書き留めたものである。その総句数七九四八、これを新年、春、夏、秋、冬と季節別に分類整理している。

『承露盤』は昭和十二年（一九三七）九月二〇日、寒川鼠骨が改造社版子規全集の付録にするため、正岡子規編著として巧芸社から刊行した。したがって子規在世当時は一般には知られていない。

なお、（『俳文学大辞典』和田克司氏）によると、この『承露盤』の「子規の自筆草稿は、子規庵重修のため一枚ずつ配布された」という。

子規選集『承露盤』に入集した菰堂の句を次にあげる。句の下に、『新俳句』とあるのは『承露盤』の他に『新俳句』にも同句が掲載されたもの、同じく『日本』は新聞『日本』に、『ほと、ぎす』は松山版にも掲載されたものを含めて日付とともに解る限り記した。菰堂の計六十九の内訳は明治二十九年三十一句、同三十年、三十五句、三十一年一句、三十二年二句が確認される。今回はこうした中

から、明治二十九年の状況を掲載する。『承露盤』の俳号は「菰堂子」、他は「菰堂」である。

『承露盤』掲載、菰堂子（菰堂）句

明治二十九年（31句）

古店に売らるゝ雛のあはれなり

菰堂子

茶をのんで山を見てゐる日永哉

同『日本』明29・4・7、

『新俳句』

春雨や殿光菊を召し給ふ

同『新俳句』

背戸川に家鴨眠りてあたゝかき

同『日本』明29・5・3、

『新俳句』、

眞白に櫻さきけり大江山

同

雛殿も寐ませ玉へ桃の月

同『日本』明30・5・9

『ほと、ぎす』13号（紙雛

も）

衛士のたく簪の上や花吹雪

同『日本』明30・5・9

散るは／＼烏帽子に袖にさくら／＼

同『日本』明30・5・9

『ほと、ぎす』13号

夕月や蝙蝠さわぐ無住寺

同『日本』明29・5・12

芝は扇螢火は其繪なりけり

同『日本』明29・6・28、

『新俳句』

花桐に夕月細し塀の内

同『日本』明29・6・29

月涼し蓑笠を着て人戻る	同『日本』明30・5・25
涼しさに飛はんともせず鷺一羽	同『日本』明30・5・25
夕顔や瓜番の家灯のともる	同『日本』明30・6・21
衣更て日本一の御姿	同『日本』明30・6・21
下闇を出つれば歌の中山寺	同『日本』明30・6・8
光菊に袷をたまふ大臣哉	同『日本』明30・5・25
背戸口にふらりと下がる南瓜哉	同『日本』明30・6・24
手を伸ばし足を伸ばして蚊帳の月	同『日本』明29・8・9、 『新俳句』
夕紅葉樵夫歌ふて帰りけり	同
秋風か糸瓜をふくは面白や	同
芭蕉葉やある夜風雨の来たり過ぐ	同『日本』明29・10・29
『新俳句』	
朝曇りぷつとふくる、桔梗かな	同
大いなる松茸得たり茨の中	同『日本』29・10・29、 『新俳句』
鞭うてば牛倒れんとす枯れ野原	同『日本』明29・11・23
枯野原萩も芒も焚かれけり	同『日本』明29・12・1
行燈くらき浦の蕎麦屋や鳴く千鳥	同
灯をともし家四五軒の枯野哉	同
駕舁の刀とり出す枯野かな	同『日本』明29・12・14
乞食のふるは／＼と菰の雪	同『日本』明30・1・3、

『新俳句』
枯れ／＼て一本芒倒れんとす 同

この『承露盤』で子規に選句され六九句という句数の多さを見ると、菰堂が二十三歳の若さで、俳誌を立ち上げようとした理由が見えてくるような気がする。ここにはまだ四明も一句も出ていない。次に『新俳句』に掲載された中川四明と菰堂の句を見る。

『新俳句』は掲載総数四八五七句、掲載人数はおよそ六百余名であるが、四明は八句、菰堂は九句である。紙幅の関係で菰堂の作品のみをあげる。

大釜菰堂 掲載九句、	
長閑 背戸川に家鴨眠りて暖き 菰堂	『日本』明29・5・3
日永 茶を飲んで山を見て居る日永かな	同
春雨 春雨や殿光菊をめたまふ	同『日本』明30・4・14
蚊帳 手を伸ばし足を伸ばして蚊帳の月	同『日本』明29・6・28
涼し 月涼し引っぱり上げる大錨	同
名所の部 平等院	
芝は扇螢火は其の絵なりけり	同『日本』明29・6・28

茸 大いなる松茸得たり茨の中 同

芭蕉 芭蕉葉やある夜風雨の来り過ぐ

同

雪 乞食の降るはくくと菰の雪 同 『日本』明30・1・3

菰堂の方が早くから子規の新聞『日本』その他の俳句欄に投句していて名前が見える。従って句歴では菰堂の方が勝るが、年長者であり、京都では著名な美学者の四明を越える九句が掲載されていることは、若い菰堂が自ら俳誌を立ち上げようとするエネルギーとなつたであろう。新聞『日本』の読者は俳句欄の「子規選」で、また『ほとゝぎす』の読者は、四明の報告を筆頭とする「地方俳句会」・「京都通信」などで、菰堂の活躍を知ることが出来た筈である。

菰堂はおそらく京阪俳友満月会の中でも松山以外の若手作者として、子規の初期の評価が高いと言う点では一頭地を抜いていたのである。それで「俳人としての格付けが定着した」（清水徳太郎「新宮町新派俳句事始」）ということでもあつたろう。

明治という新しい時代の空気の中でも日本派の俳句はそう簡単に最初から受け入れられたわけではない。そのことは四明、鼠骨と共に京阪俳友満月会を設立した水落露石が「当時日本新聞への投句家は極めて少なかった」と証言している。（傍線・論者）（水落露石「四明翁を哭す」『懸葵』七月号 故四明翁追悼号）。

四明は京都に戻ってから新聞『日本』に寄稿し、京阪俳友満月会を立ち上げてからはその句会稿を掲載し、また『ほとゝぎす』の東遷以降は子規の要請で、「地方俳句会」の筆頭に京阪俳友満月会の句稿と活動状況を『ほとゝぎす』に掲載した。こうした新聞、雑誌での刻々の情報は、地方俳句会の設立に大きな役割を果たしたのである。四明は新聞『日本』の寄稿者であり読者として菰堂が度々『日本』に投句し、子規選に入選していることも熟知していた筈である。それを踏まえて菰堂の『種ふくべ』を応援し、子規に論文と選を依頼し、鳴雪や露月、露石、などの有名俳人に声をかけて祝句も集め花を添えてやつたのである。表紙の大きなふくべの中に書かれた「種ふくべ」の文字は四明の筆跡であることを、亀田小帖が随筆「春は行く」で証言している。

そう考えると大釜菰堂の熱心な新聞『日本』への投句とその成果は京都の知識人である中川四明を動かし、また俳句革新を進める子規を励ますものであったことが見えてくる。

無名の菰堂の情報は非常に少ないが今回小さな発見があつた。

その第一は、『ほとゝぎす』松山版第八号（明治三十一年八月）の「風交」欄に掲載されている四十五名の名簿のなかに菰堂の氏名が見えることである。大釜菰堂（彌三郎）京都市五条通伏見街道東入」と住所も記載されている。松山版『ほとゝぎす』は子規の幼なじみで、海南新聞の社員であつた柳原極堂が明治三十年一月十五日松山で創刊。ほぼ一人で編集発行を担い翌三十一年八月三十一日、

二十号まで発行し、東京の虚子と子規に引き継いでいる。「風交」は現在の会員のようなものと思われる。

その第二は、菰堂と四明の接点で、菰堂自身が「故四明翁追悼號」（大正六年『懸葵』七月号）に次のような思い出を書いている。

二条富小路の銅鉦坊に住はれた頃は、瘦石、煙村、鯢江、私等の独逸語を教はった時代で、氷川翁勝海舟伯の小自在の額は此の時代から書斎に掲げられてあった。

四明が「萬有家塾」を開き、ドイツ語や科学を教えていたのは、明治十一年から明治十七年頃までの、京都府に新設された師範学校の教師時代である。（清水貞夫「四明中川重麗略年譜」『俳人四明覚書四』平成一九年三月 現代文藝社）。とすれば明治九年生まれの菰堂は少年時代から、成人後には句友となる子供達とともに四明の塾に通い、当時から面識があった事になる。つまり、菰堂と四明のそのような長い交流の蓄積の中から、菰堂は四明の京阪俳友満月会の設立に立ち回り、またその交流から『種ふくべ』は生まれた。結果的に新宮版『種ふくべ』まで発行し拙速の失敗もあったが、菰堂は未だ投稿者も少なかった新聞『日本』に、松山以外の京都から黙々と熱心に投稿することで子規の新派俳句の伝播に貢献していたのである。

五 『種ふくべ』と京阪俳友満月会

この章では『種ふくべ』の母体となった京阪俳友満月会を考察する。

新聞『日本』の記者であった中川四明（重麗）は、明治二十三年九月出身地の京都に戻るが『日本』には継続して記事原稿を送っていた。同二十五年十二月子規が『日本』に入社し四明の後輩記者となる。

新聞『日本』は明治二十二年二月十一日、陸羯南によって創刊されたが、このとき中川四明（重麗）は記者として設立に参加していた。編集長の古島一雄は『日本』が若者に与えた影響について次のように語っている。

紙面は振仮名ぬきの漢文口調だから、無論一般向きではなかったが、雄健なる文章と溢れる情熱とは、青年の血を湧かし、当時神田の下宿屋では、この新聞を取るのを誇りとして居った。

（古島一雄「回想の子規」『子規全集 別巻二』）

京都に戻った四明を、子規の紹介で京都中学の学生であった松山出身の寒川鼠骨が訪ねる。以後二人は頻繁に吟行を重ね四明が送付する記事原稿に添えて、『日本』に俳句を投句する地道な活動を続けていた。

子規を応援する俳句結社としては子規の郷里松山に松風会が出来ていたが、それはまだ同窓会のような地方の集まりに過ぎなかった。それに引き替え京阪俳友満月会は、その設立の経過から一貫して、片隅ではあったが、当時の若者に人気を得ていた新聞『日本』に掲載され、子規や俳句に関心を寄せる読者に直ちに伝達されたものであった。

明治二十九年八月十八日、例によって吟行に蓮の花を見に出かけた四明、鼠骨、大阪の水落露石の三人は俳句結社立ち上げの相談をする。その模様を設立発起人の一人水落露石が記録している。

京阪満月会が成り立ったのもまた此時である。(略) 会規万端悉く翁の創意で、毎月一回満月の夜を以て会すとか、月の出汐を待つて会を開くといふやうな、なか／＼振るつた会規が案ぜられたのである。当時日本新聞への投句家は極めて少なかったのであるが、はからず今宵の如く三人会してみれば、尚他にも多少の同好者が無ければならぬ。それには何か会のやうなものを設ける必要があらう。これが満月会の成り立った起源であり、また地方に俳句の集団が出来た最初のものであったらう。

ここに露石が回想するように、京阪俳友満月会は、子規の出身地松山の「松風会」を除けば、地方に日本派の俳句集団の出来た初め

てのものであった。しかも「当時日本新聞への投句家は極めて少なかった」と露石はいう。従って子規にとってはまだ不安定なこの時期に、かつて予備門の教師であり、新聞『日本』の記者であり、京都では「美学者」として名の知られた知識階級であった四明の参加は、投句者にも、投句しようかと思ひあぐねていた読者にも背中を押すものであり、子規の俳句革新を励ますものであった。

水落露石が「なか／＼振るつた会規」という、四明が創意工夫した「京阪俳友満月会 無趣意書」という会規は次のようなものであった。

「京阪俳友満月会」無趣意書（『日本』明治二十九年九月二日より抜粋）

- 一、満月の夜を以て雨天にても構はざる事
- 一、遅くとも月の出まへ二時間に集会すべき事
- 一、会場には満月会と記したる大提灯を出し目印と致すべき事

- 一、政談は月の西より出ることあるも禁制の事
- 一、酒肴はめい／＼おのが飲みおのが食ふほど持参すべき事
- 一、席上の吟詠及び兼題の詠草は共に取り纏めて日本新聞社へ送るべき事

一、臨時会と云ふと雖も成るべく新月、二日月、三日月、上弦、下弦、十三夜

十六夜、廿三夜等の日を以てする事

「月の出まへ二時間に集合のこと」「政談は禁制」「飲食は自分の嗜好に合わせて持参」、つまり風流一筋につながるお互いを認め合つて、他人に迷惑をかけず、そして句会は臨時であつても新月、二日月、三日月、上弦、下弦、十三夜、十六夜、二十三夜の月の出汐に集まろうという風流なものであつた。

「京阪俳友満月會第一回記」は新聞『日本』に、明治二十九年九月二十九日、寒川鼠骨によつて報告されている。互選と思われるが菰堂の巻頭句以下二十七句が掲載されている。ここでは菰堂、鼠骨、四明、虚子をあげておく。四明はまだ、紫明であつた。

野分してちいそうなれる狸哉 菰堂

稲妻や月も出ていて雲奇也 鼠骨

明月や三十六峰なくもがな 紫明

萩を壓して床几すえたり露の中 虚子

事実これを契機に、翌三十年には「奥羽百文会」（仙台）、「松声会」（長野）、「北声会」（金沢）、「北斗吟社」（秋田）など次々と日本派の俳句結社が誕生したのである。

明治三十五年九月十九日子規が没する。四明は京都『日出新聞』

に追悼文を掲載する。

「仲秋の満月の夜」（抜粋）

中川四明

生が日本新聞社を辞して京へ帰つたのが明治二十三年の九月、子規君が同社へ入られたのが二十五年、故に子規君と同じ神田の編集局で卓子を並べたことは無く、子規君が非無子の手を経て写真を送りて呉れたのが一昨年、（中略）生は此時初めて子規君に逢ふたのである。

けれども日本及び小日本に子規君の俳句が出てから、初めて俳句の趣味を解し、京都にも之を伝えし、請ふ隗よりの例に倣ひ、句作も試み、終に今から満六年前の仲秋に満月会の初回を開いたのが濫觴で、其後日本派の俳句、所謂蕪村調の新派は四方に起り、今日の隆昌を致したので僅か十年の間に斯くまでに至らんとは、蓋し子規君自らも予想されなかつたであらうが、明治の俳壇今日あるは、実に子規君の賜である。（略）蕪村が百年の後に、此の人を待ちて名を顕はしたかとも思はれるのである。

今訃音に接したれば、茲に同人諸君に告ぐ、哀しい哉。

月暗く悲しや秋の子規

（『日出新聞』）

四明は、子規の命日が九月十九日と知り、六年前子規を応援するため全国に先駆けて京阪俳友満月会を立ち上げた月の夜を万感の思

いで回想する。

四明が子規の訃報をどんなに残念に思ったかは明治三十七年に自ら創刊した『懸葵』に「子規氏の遺訓」として、嘗て子規に懇願し京都版『種ふくべ』に掲載した「俳句上の京と江戸」を再掲載したことも窺われる。そこには「子は既に世に在らず、涙とともに撮影の霊前に供えて、吾等同人の之を遺訓として長く守らんことを相誓ふのみ」と、遺訓として受容し、伝えていくことを誓っている。菰堂は以後、この『懸葵』の同人、選者として、四明達とともに毎年の子規忌を長く大切に修している。

おわりに

「幻の俳誌」（清水徳太郎「新宮町新派俳句事始」とされる新宮版『種ふくべ』と大釜菰堂の調査を経て、改めて子規の俳句革新は、子規やその周囲にいた人々だけでなく、子規が設けた新聞『日本』の投句欄や『ほとゝぎす』などの新しい媒体を通じて、新宮のような遠隔の地にいた人々にも即座に伝達された事が解る。しかし、第四章でも述べたように「当時日本新聞への投句は極めて少なかった」（水落露石『懸葵』「四明翁追悼号」という。明治九年生まれの京都の大釜菰堂はそうした時代に、松山出身者ではない立場で熱心な投句者であった。子規が手許控えとして明治二十八年から三十年までの投稿句を選別、整理して書き残した『承露盤』には大釜

菰堂の句が六十九句掲載されている。そして新聞『日本』を調べるとその多くが『日本』に投句されたものであることが確認される。

新聞『日本』の先輩記者であり、京都へ戻ってから『日本』に「京都便り」をはじめとして、多様な記事文を掲載していた中川四明は、子規を応援するために菰堂や京阪の若者を巻き込んで明治二十九年九月京阪俳友満月会を立ち上げる。菰堂は最初からこれに参加し、明治三十一年には四明の紹介で『日出新聞』に入社する。そして明治三十三年、四明の応援を得て『種ふくべ』を創刊するのである。ここには、四明が子規に懇願した子規晩年の俳論「俳句上の京と江戸」が掲載された。しかし『種ふくべ』は一号のみで、発行者大釜菰堂の新宮移住により廃刊となった。

それから四年後、四明は俳誌『懸葵』を創刊し、巻頭にこの「俳句上の京と江戸」を再掲載し、最初に掲載した『種ふくべ』が一号で廃刊したことを子規の霊前に詫び、以後これを遺訓としていくことを誓っている。

一方菰堂はこれに先立つ明治三十三年春、新宮に創刊されたばかりの新聞『熊野實業新聞』の記者となる。都落ちの思いで新宮に移住した菰堂を待っていたのは思いもかけず、すでに熊野に存在する日本派の俳句結社「金曜会」であり、それを主宰する医師の湯田猿叫とその仲間であった。

菰堂と猿叫はたちまち意気投合し、新宮俳壇の黄金時代を迎えた。清水は「新宮町新派俳句事始」に伝えている。

しかしそれは長くは続かなかった。この年の八月、猿叫は肺患で亡くなるのである。このとき菰堂は落胆を發憤のエネルギーに変えたのであろう。彼は「ここに金曜会の創立者を失うこととなったが、その後猿叫の偉業は果して美しき実を結び、今や会員も二十余名に上がつて、優に日本俳壇南海の雄鎮と目せらるゝ迄になった。(略)幸いに雑誌『種ふくべ』も此会の助太刀を得て再び発刊の運に会し、」と、新宮版『種ふくべ』二十六頁に、「金曜会(紀州)」と題して発刊の動機を述べている。菰堂が新宮に移住したとき、菰堂の言う京都版『種ふくべ』の「発行権」は、編輯発行者の菰堂について共に移動したと考えられる。したがって菰堂としては、決心次第でいつでも俳誌を発行できる立場にあった。菰堂の決意は確かに拙速の感否めない。しかし彼は「大いに関西の俳壇に貢献する所あらんと期するに至ったのである」と意気軒高である。そして「一号雑誌ではあつたが俳誌(京都版『種ふくべ』を指す・論者)も出したこともある若者」である菰堂によつて、「新宮俳壇の黄金時代」が到来したのである。「新宮有力者の援助の期待が菰堂念願の『種ふくべ』復刊に踏み切らせたのだらう」と清水の指摘がある。もちろんそれが第一であらう。ことはしかしそれだけではなく、菰堂の胸中には、都落ちのように新宮に來た自分を、思いもかけず歓待してくれた人物、新派俳句「金曜会」主宰の医師、湯田猿叫(二十八歳)の夭折に遭遇し、彼のためにも追悼号のようなものを残したいという強い気持ちがあつたであらう。明治三十三年十月六日、猿叫

初七日の追悼句会での菰堂の句を記しておく。

猿叫の遺句に朱をうつ夜寒かな

菰堂

そして十一月二十五日、『種ふくべ』新宮版の發行に漕ぎつけた。しかし資金的な問題、出版法の問題への備えが足りず、「初号発刊の次に再び初号の発刊を見るが如き奇觀を呈し申し候」(新宮版『種ふくべ』稟告)という結果になり、結局『種ふくべ』一号を二種出版して終わったのであつた。

以上の通り、本稿はまず『種ふくべ』が確かに新宮でも發行されたことを確認した。しかしそれは、出版意図や内容において、京都で四明の協力を得て、子規の論文を掲げて發行した京都版『種ふくべ』とはその意図も内容も、明らかに異なるものであつたことを確認した。したがって俳誌『種ふくべ』は四明の認識の通り京都版の第一号で終刊。もしその後継誌を問うならば、子規評論を再掲載して發行された『懸葵』をそれとすべきであらう。新宮版の『種ふくべ』は出版法の問題も含めて、「復刊第一号、種ふくべ」、若しくは「新宮版第一号種ふくべ」として、京都版とは明確に区別すべきものと判断される。

参考文献

俳誌『種ふくべ』明治三三年四月三日 種ふくべ發行所(京都版)

俳誌『種ふくべ』明治三十三年一月二五日 種ふくべ発行所（新宮版）

清水徳太郎著「新宮町新派俳句事始」『熊野誌』第二十六号 特集号

昭和五五年六月

俳誌『鯨』創刊号 明治三五年一二月五日 くじら発行所

俳誌『懸葵』創刊号 明治三七年二月一日 懸葵発行所

俳誌『懸葵』大正六年七月号「故四明翁追悼號」懸葵発行所

新聞『日本』（日本新聞社 明治二七年～明治三五年）

新聞『小日本』（日本新聞社 明治二七年二月一日～同七月一五

日）

正岡子規編著『承露盤』（寒川鼠骨 巧藝社 昭和一二年九月三〇

日）

（子規全集第一六卷『俳句選集』講談社）

正岡子規編『新俳句』上原三川・直野碧玲瓏共編（民友社 明治三

一年三月）

成田総一郎『實務上より見たる出版法略義・出版関係法令集』（昭和

八年三月一八日 丸の内出版）

村山古郷著『明治俳壇史』（角川書店 昭和五三年九月）

寒川鼠骨著『正岡子規の世界』（青蛙房蔵版、昭三二年一〇月）

神林恒道編『京の美学者達』（晃洋書房 平成一八年・一〇月）

清水貞夫編『四明中川重麗小事典』（現代文藝社・平成二七年三月）

清水貞夫著『四明中川重麗の美学』（現代文藝社 平成二九年四月）

松本 皎著「補遺・京都版『種ふくべ』のこと」（俳誌『俳星』平成二六年一月）

坪内稔典著『子規とその時代』沖積社 平成二三年一月）

復本一郎著『子規とその時代』三省堂 平成二四年七月）

ドナルド・キーン『正岡子規』（新潮社 平成二四年八月）

『生誕百年記念正岡子規 夏目漱石・柳原極堂』（松山観光コンベン

ション協会 昭和四一年九月）

『生誕150年正岡子規展―病牀六尺の宇宙』（神奈川文学振興会

平成二九年三月）

*この論文の調査にあたり、新宮版『種ふくべ』原本の複写資料及び、雑誌『熊野誌』をご提供下さいました和歌山県新宮市立図書館に心から御礼申し上げます。

Study for Ogama Kodo – The reason why two editions of TANEFUKUBE exist–

NEMOTO, Ayako

Ogama Kodo was a haiku poet in Meiji era and he cultivated fellowship with Masaoka Shiki and Nakagawa Shimei. In 1890, he issued a haiku journal called “Tanefukube” as a main editor with Shimei, and “Haiku-jou-no-Kyo-to-Edo” written by Shiki was appeared on this journal at first. In general, people thought that this “Tanefukube” was issued first edition only because Shimei mentioned it on “Kakeaoi”. However, Kodo had issued “Tanefukube” again. First “Tanefukube” was issued in Kyoto, and Second “Tanefukube” was issued in Shingu.

In this paper, I consider why Kodo issued “Tanefukube” again and why Shime said that “Tanefukube” ceased publication after its first edition through researching “Tanefukube” issued in Shingu